

猿新聞

編集・発行
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

出没回数が多い集落

思い当たる節は？

サル被害の中心は爺ちゃん婆ちゃんや育てている自家用作物です。出荷する作物ではないから皆さん被害を届けません。自家用作物被害を含めると被害総額はもっと高額になるでしょう。サルの被害は、金額だけではありません。山間地では、サル被害で作物が収穫できないと、耕作意欲がなくなり耕作放棄地が増え、住んでいる人達の生きる意欲の喪失にもつながり、集落の維持にも影響する深刻な被害になると言われています。

左のグラフは、名張A群・B群の昨年一年間の出没回数を示しています。名張A群での青蓮寺湖、ひなち湖周辺の出没回数の多いのは原因があり、青蓮寺湖では初夏の桑の実、ひなち湖ではニセアカシアの花にA群の大半が集中します。つづじヶ丘周辺も最近出没回数が増えています。耕作地の少ない市街地に何故出るのかな？

名張B群では、安部田周辺が急激に出没回数が増えています。特にトンボ池。また、5、6年前までは、元錦生小学校付近が東の境界でしたが、坂の下、井手とR65山方を東方に遊動域が広がっています。一度味を占めると追いつくのが非常に困難になります。

坂の下、井手、結馬、黒田周辺も「ころばぬ先の杖」早急に防備をする必要があります。ホームページ「名張鳥獣害問題連絡会」では、毎月サル移動位置をお知らせしていますので是非参考にしてください。「名張鳥獣害問題連絡会」

山に棲めないサル

全ての、野生動物は気象条件の厳しい奥山よりも、気候も穏やかで餌が豊富で安全な集落を常日頃から狙っています。サルも本来は、奥山で暮らす動物で、昔は、私たち人間界とは緩衝地帯(里山)で棲み分けが保たれていました。しかし、近年、里山が緩衝地帯としての機能がなくなりました。サルたちは、遊動域を奥山から人の住む里山に移ってきています。

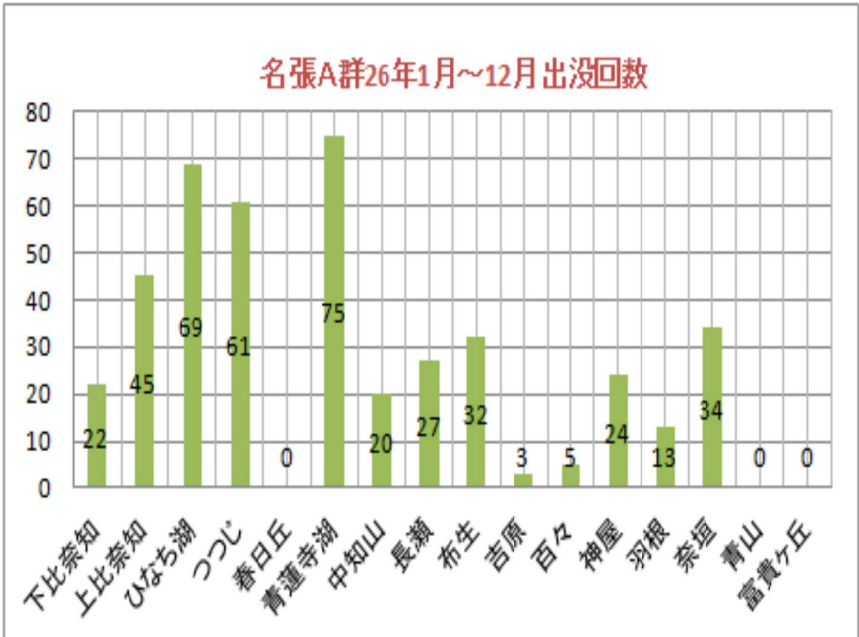
山から人間界に下りてくるまで、実に20年位の時間がかかっています。野生のサルは、平均寿命が10才くらいですので、最近生まれたサルは奥山の暮らしの経験はなく、現在の集落での生活が普通だと思っています。また、親ザルは、子ザルに対して集落でのエサの探し方を教えます。そういった子育てが繰り返される事によって、集落でしか生きられないサルが生まれてきます。これはサルにとっても不幸なことです。

こうした集落依存ザルは、エサが豊富にあるため出産年齢、死亡率が低く、増える一方です。サルにしてみれば、「そもそも山の中を、動物が棲めないような状況にしたのは誰だ!」といっているかも知れません。野生動物をはじめとする生態系への配慮を欠いた人間の勝手な行動を反省し、これからは棲み分けを視野にいれた関わり方を考えなければならぬ時代だと思えます。

林の拡大政策。山林開発。山間地集落の衰退。狩猟の減少。温暖化。等々。シカの生息数が減らない原因は？。生息数を上回る大量の餌があるからです。シカは、栄養状態がよければ毎年15%程度増えるといわれています。奈良公園ではシカの総数は千頭前後で、増えも減りもせず横ばい状態に推移しているそうです。その理由は、奈良公園には千頭分の餌しかないからだといわれています。これで、エサの量によってシカの生息数が決まるということが判ります。秋に千頭のシカが生き残っている餌があつたとしても、冬の餌量が百頭分しかなければ、シカは百頭以上には増えないといわれています。

一年の中で最も餌が少ない冬の餌量が、シカの生息頭数を決めるので、つまり、冬場のエサを減らすことが最大のシカ対策になります。集落内での無防備の畑や無意識の餌づけ(残さ等)をなくすことが大事です。また、冬場の餌となる稲のヒコバエや、冬に青草が生えないように畦の草刈り時期を変えたりして、冬の餌をなくすことが大事です。シカ対策として最も安定した効果が得られ、比較的費用も抑えられる方法として、防護柵が推奨されています。防護柵には、個人の田畑を囲う「個別柵」と、

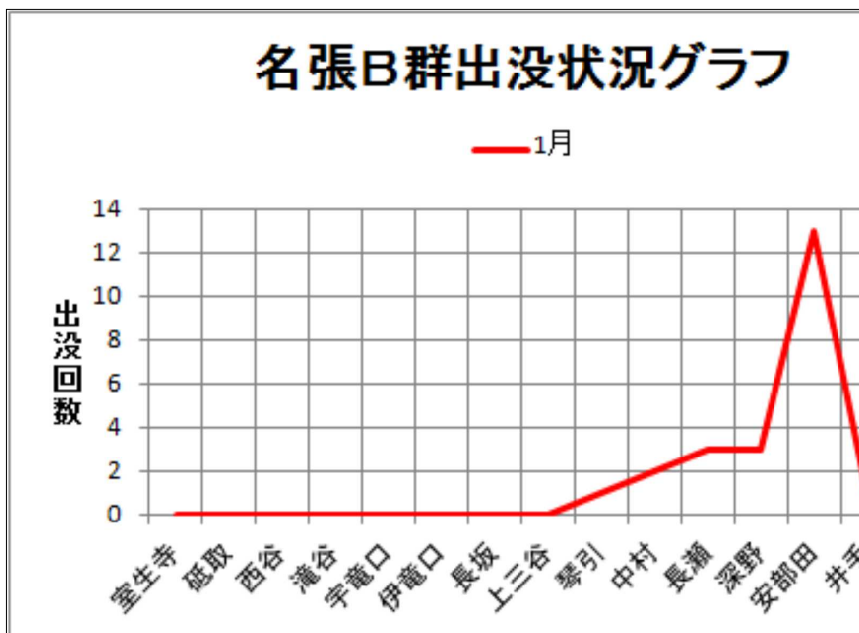
集落全体を囲う「集落防護柵」があります。個別柵は、効果的で、材料強度や高さが不十分でも、シカは視覚的に狭い柵の中への侵入を警戒する性質があるので、極めて優れています。集落防護柵は、うまく設置すると大きな効果を発揮しますが、道路や地形的条件により大きな効果が得られていないのが現状です。点検修理に労力がかかるなどの問題もあります。



最近、シカが急増しシカの被害が全国で深刻な問題となっていて、一方的にシカが悪いようにいわれていますが、考えてみればシカの生息環境を変えてしまったのは、エゴ的な人間の活動です。それが原因となりシカの生息域の拡大や被害を引き起こしているということを認識して、対策を立てることが重要です。

シカが増えた原因は？。明治以来の保護政策。天敵オオカミの絶滅。人工シカが増えた原因は？。

冬場のエサ。冬場のエサを減らすことが最大のシカ対策になります。集落内での無防備の畑や無意識の餌づけ(残さ等)をなくすことが大事です。また、冬場の餌となる稲のヒコバエや、冬に青草が生えないように畦の草刈り時期を変えたりして、冬の餌をなくすことが大事です。シカ対策として最も安定した効果が得られ、比較的費用も抑えられる方法として、防護柵が推奨されています。防護柵には、個人の田畑を囲う「個別柵」と、



集落全体を囲う「集落防護柵」があります。個別柵は、効果的で、材料強度や高さが不十分でも、シカは視覚的に狭い柵の中への侵入を警戒する性質があるので、極めて優れています。集落防護柵は、うまく設置すると大きな効果を発揮しますが、道路や地形的条件により大きな効果が得られていないのが現状です。点検修理に労力がかかるなどの問題もあります。

サルの出没状況

名張A・B群

A群では、最近つづじヶ丘への出没が目立ちます。ハナレかな？。ハナレは群れで行動するサルと違い、どこにでも出没する傾向があり、市街地など普段見かけない場所にも出没します。

B群では、トンボ池地区への出没回数が顕著になっています。

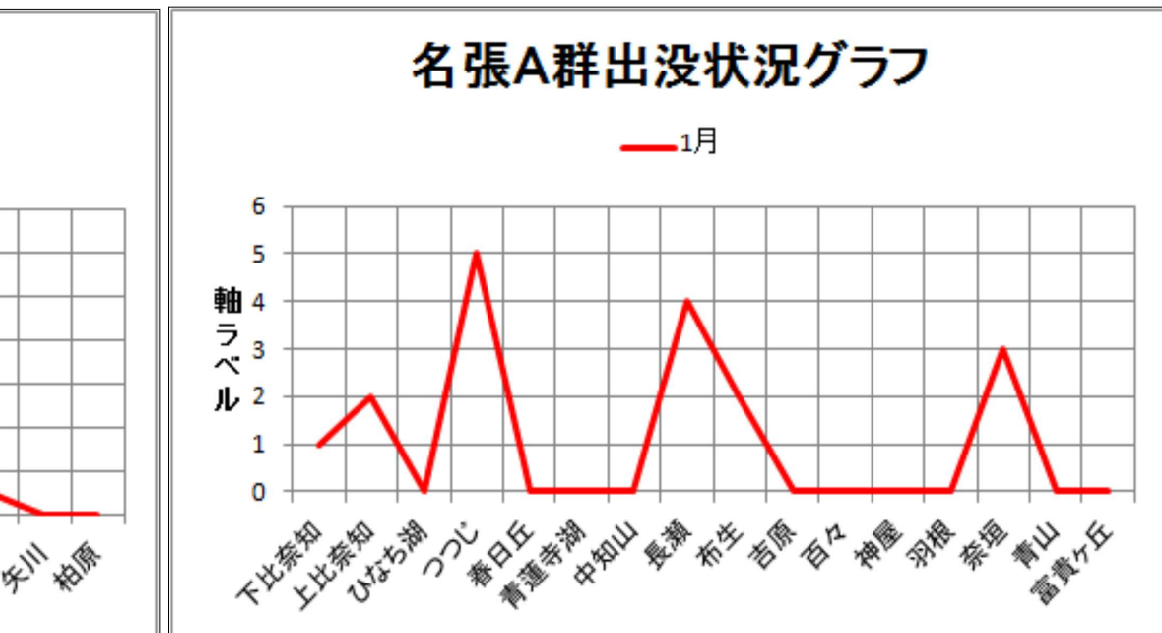
指南員報告

1月のサルの動向

A群は、先月と同様、遊動域のほぼ全域を遊動しつつ食餌資源の状況によって一定区域に数日間滞在する傾向が見られます。

B群は、安部田地区とその附近に滞在し続けていました。

両群共季節柄、採食傾向が、栽培物への依存を高めており、被害が続出しています。



集落全体を囲う「集落防護柵」があります。個別柵は、効果的で、材料強度や高さが不十分でも、シカは視覚的に狭い柵の中への侵入を警戒する性質があるので、極めて優れています。集落防護柵は、うまく設置すると大きな効果を発揮しますが、道路や地形的条件により大きな効果が得られていないのが現状です。点検修理に労力がかかるなどの問題もあります。